

第13回 「自治体の財政再建に関する一考察」

講師氏名 黒瀬雄大氏(交野市議会議員・大阪大学後期博士課程在学中)

ワークショップ概要

本日のワークショップは、市政経営について「SIM ふくおか 2030」という政策シミュレーションゲームの手法が取り入れられ、対話型の形式で行われた。今回は参加者を3つのグループに分類し、仮想の都市「えふ市」の2030年までの予算編成を疑似体験するという設定で、参加者全員が「市役所の局長」として其々の役割を果たすべく対話をすすめていった。

SIM ふくおか 2030 とは

「SIM ふくおか 2030」の原型は、熊本県庁職員の自主活動グループが作成した対話型自治体経営シミュレーションゲームで、プレイヤーが仮想の自治体の局長となり、2030年までの迫りくる課題を、他の局長と協力して判断をするものである。「SIM 熊本 2030」は話題となり、「SIM ふくおか 2030」は派生バージョンの1つとのこと。

対話の流れと感想

「市長」から辞令がおりた各「局長」は、市長の訓示の後、市の政策課題についてミッションを遂行すべく市民の最大幸福量の最大化に努めていくのだが、このような形で考察・討論するという試みは、「対話」「納得」「説明」を念頭に展開された。それは架空の自治体「えふ市」の現状分析をしたうえで、事業見直しや財政状況の確認、財源捻出策、まちの強みについて話し合い、さらに市の新名称まで提案するというものだったが、この一連の流れを通して、自治体経営・まちづくりの難しさについて考えさせられた

このシミュレーションゲームにおいての「まちづくり局」「環境・農林局」「福祉・子ども局」「市民・防災局」「経済文化局」「総務財政局」の六つの局は、現実の市政に置き換えられ設定されていたが、どの局の事業案も市民感覚として身近な問題であり、予算編成見直し事業の対象として切り捨てるのは難しいものだった。しかし納得のいくように、つまり他局長を説得できる結論に導くことができるよう、対話を使って実践的に話し合いを進めていくことは、非常に充足感のあるものだった。

現在の日本は少子高齢化により生産年齢人口は大きな伸びが見込めず、老年人口の増加により医療、介護などの社会保障費が膨らみ続ける見通しである。市債残高はむやみに増やせず、市有建築物のアセットマネジメントなど課題は山積みである。そのような中でも市民の最大幸福度を高め、働きやすく住みやすいまちづくりというのは政策課題として大変重要であり、柔軟な考え方をもちて複雑化する社会変容に対応していくことは急務といえよう。

今回のシミュレーションゲームを通して、都市経営研究科在学生の各自が、新たな視座で市政や公共経営について考察できたと思われる。このゲーム体験は近未来を見据えた具体的なものであったが、未来における他の可能性を模索する側面も持ち得る、大変有意義なものだといえる。

以上

(文責:辻有美子)